

津軽塗り

ば・る・るホールへ津軽塗りを使いたいという話は着工2年ぐらい前から進んでいたのですが、まだ先は長いという実感のほうが強く、あまり深く考えることもなく時間が過ぎてしまい、いざ本番という時には、初めて塗装するものや、重さ、大きさ、空間に対しての色彩とバランスなど、迷うこと、考えることが多く、取り付けが終わった今でも、ああすれば良かったなどと、過ぎた反省をしています。

建築物の中に漆を使うというのは、かなり前からあったことですが、ここ70年ぐらいの間はあまり見られなくなりました。たぶん近代工業への移行、生活環境の変化がそうさせたのだと思いますが、特に近年では手作りの切り捨て、工業化、大量生産へ、価格の低下、職人の仕事とはまったく違う時代へ流れていきましたが、しかし、ここ10年ぐらい前より手作りの見直しや潤いのある生活環境、天然素材へ、時代はより質の高い、手作り、新しい感覚、素材感、あたたかさを求めて動いてきています。

実際に私どもが手掛けたホテルの装飾も10件は超えていますし、また、レストランの装飾などの仕事も増えつつあります。新しい装飾の素材として漆が見直されてきているのではないのでしょうか。

津軽塗りは約350年ぐらい以前から青森県津軽地方に伝わる漆の伝統的工芸で、少し固めに調合した漆を模様元として、道具を使い小指の先ほどのホントに小さな模様をまばらに付けていきます。それは小さな漆の丘みたいなもので、全体にバランスよく適度に隙間がないような感じで、この適度な隙間の加減と使う道具の作り方により、個人個人の持ち味がかなりでてくるのが、この津軽塗りの面白さといえます。

この小さな模様を仕掛けと呼んでいますが、これを乾燥させた後、いろいろな色漆を塗り重ねて、塗っては乾燥させを何度か繰り返し、最後に一番面積を占める、地になる色を塗り、乾燥した後、研ぎに入ります。何度かに分

地元芸術家の参画

けて、研ぎは進められますが、その都度、仕掛け以外の低い所に、地の色の漆を埋めて、平らになった時点で研ぎの仕事を完成させます。

非常に目の細かいサンドペーパーで綺麗に磨き上げ、それに木から直接とった漆を刷り込み、和紙で吹きあげていきます。薄い膜を作るわけですが、これを9から10回ほど繰り返し、その間に、布や和紙でこすり、光沢を出していきます。こうして、漆独特の深い味わいのある光沢が生まれるのです。

これまで書いた工程はおおよそのもので、実際は約50工程、期間は約2ヶ月ほどかかり、製作物により、仕掛けの大きさやデザインを変えたり、塗装する色を変えたりと、いろいろなバリエーションが生まれ、考えられていきます。

今回の仕事で一番面白いのは、動くものを漆で塗装したということです。それはエレベータの扉ですが、漆は静物というイメージが強いのですが、もし動いたらどんなに面白いだろうと思っていました。それが実現できたのです。塗装するのは簡単ですが、隙間、金属との密着性、色彩、周りとのバランス、配色など、考えなくてはいけないことが多く、下書きは最後の最後まで書き直していました。

幸いにも、漆の弱点である紫外線が当たる場所ではないので、ある程度の色までは使うことができましたが、やはり取り付けが終わるまで、色の組み合わせには悩みました。地下はシックに星空と強い線の組み合わせ、1階は華やかな色を、2階は落ち着いた色、3階は明るい色彩、4階ははっきりとした色の違いを、という組み合わせですが、文字にするほど、うまくいったかどうかは皆さんが見て判断していただきたいと思います。

特に音楽会などで使用する頻度が多いエレベータですから、品格、色彩、完成度、バランスなど、気付かれる点は多いと思います。

この他にホワイエのドア、柱飾り、サインなど数多く塗装しましたが、「ウワー 津軽塗りだー」とか、「値段

が高そうだー」とか、そういう喜び方はやめていただきたいのです。

これから数多くの人たちがこのドアを通り抜けることと思います。どれだけの人が気付いてくれるか、津軽塗りと解ってもらえるかどうか、わかりませんが、私どもの作ったこの仕事の将来への可能性や、津軽塗りの深い可能性に気付いていただきたいと思います。

津軽塗りは、ただの漆器のためにある技法ではありません。大いに可能性を秘めた技法のある工芸であることを感じ取っていただきたいと思います。

柱の飾りは津軽塗りの仕掛けの技法と色を変えた津軽塗りで仕上げ、組み合わせています。春の優しい音のイメージと、夏の終わりから秋にかけての静かな音、ゆるやかな月と徐々に強まる光、それらのイメージで組み上げて作りました。

自分の好きなコンサートの終わりにドアを開けて階段を降り、ふと見上げたガラス越しにやさしげな月が見えた時に、この柱の飾りは見た人自身の中で完成されるのだと私は思っています。

頭の中を流れる音楽と飾りの印象が優しく見えるようであれば、その瞬間はその人にとり、とても幸せな時間だと思います。その一瞬のために創られた物はあるのではないのでしょうか。

遊工房 久保猶司



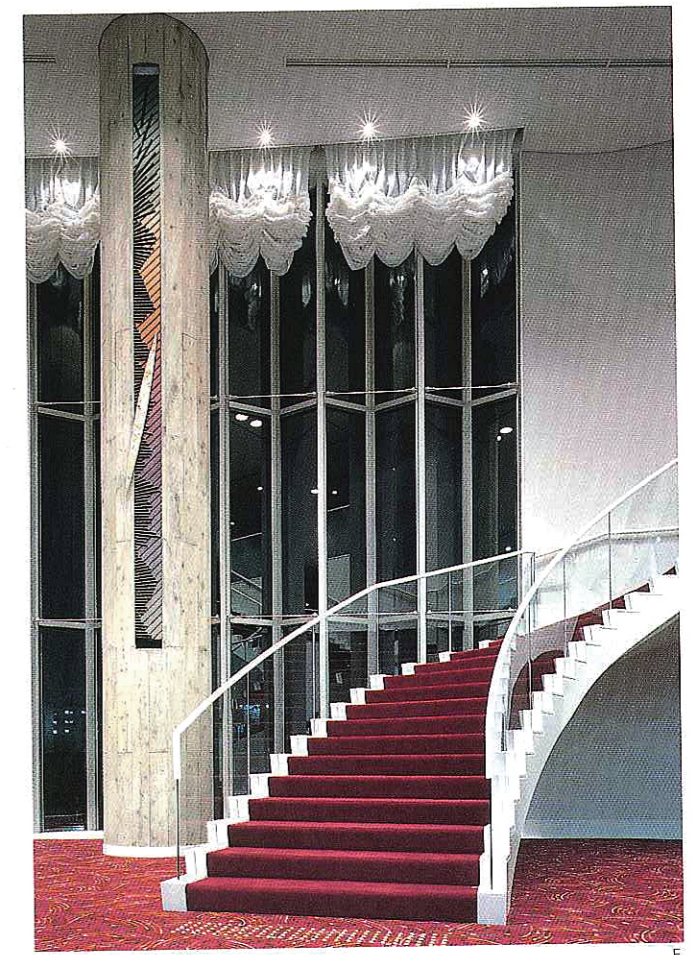
ホール扉ディテール



エレベータ乗場扉に用いられた津軽塗



ホワイエの柱飾りに用いられた津軽塗



E